

**2 (2) その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付けなど。(※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)**

**特筆すべき教育活動**

- ・学部教育では、第一セメスターに少人数教育を主眼とした「現代における農と農学」や、フィールド科学に実際にふれる「陸圏環境コミュニケーション論」、「水圏環境コミュニケーション論」など新カリキュラムを開設し、農学の基礎教育を充実させた。
- ・休学者や成績不良者に対する支援制度を整備した結果、平成19年度の未卒業者は12%と、15年度の16%を下回った。
- ・大学院では、平成19年度の学生による原著論文発表数が129報と、平成15年度の112報に比べ15%増加した。
- ・平成19年度の学生による国際学会での発表件数が80件と、平成15年度の38件に比べ2倍以上に及んでいる。
- ・平成19年度のJSPS特別研究員への採用は11名と、15年度の9名を上回っている。
- ・学生の受賞数も30件に及んでいる。学位授与率は修士・博士ともに90%を超え、高い水準にある。

**特筆すべき研究活動**

- ・平成19年度の原著論文や著書などの公表数は615と、15年度の総数306の2倍以上に及んでいる。
- ・特に英文の原著論文は100報近く増えており、国際的に評価の高い雑誌への公表も数多くある。
- ・主な雑誌は次の通りで、雑誌名のあとに2007年のインパクトファクター(IF)を記載した。  
 Plant Cell (IF9.653), Proc. Natul. Acad. Sci. USA (IF9.598), Nucleic Acids Research (IF6.954), Plant Journal (IF6.751), Oncogene(IF6.440), Cellular and Molecular Life Science (IF5.239).  
 これら以外にも、IFが3.0以上の雑誌が約30種類にも及び、本研究科の高い研究活動を示している。
- ・平成19年度に海外で開催された国際会議の招待講演は35件である。
- ・科研費の平成19年度の採択状況も順調で、15年度の2億7千万円より約1億5千万円増加している。
- ・平成19年度から23年度までの予定で、文科省特別教育研究経費連携融合事業に有機性資源循環の課題が採択された。
- ・この事業は、本学の多数の部局の参画により提案を検討している文科省の「特色ある環境科学技術への取組」を申請する基礎となっている。
- ・平成16年度に設置された寄附講座「テラヘルツ生物工学」の研究内容は、19年度に部局内中間評価を行い、高い評価を得た。

### 特筆すべき社会貢献活動等

- ・本研究科教員は所属学会で会長や理事などの委員を務めるほか、公開講座・講演・小中学校への出前授業や部局への受入など、地域社会にも多大な貢献をしている。
- ・各省庁や公的機関の専門委員やプロジェクトの評価委員等を数多く務めており、なかでもJSPS学術システム研究センターの専門研究員（平成15－17年度）、同主任研究員（平成18－20年度）や、科学技術・学術審議会専門委員（平成19－20年度）、日本学術会議連携会員（平成17年度－20年度）などを輩出し、日本の学術研究推進にあたり大きな貢献をした。
- ・フィールド科学を実際に体験できる地域開放事業や、高校生対象の臨海実習・小学生対象の総合学習や海洋講座など、地域社会にも多大な貢献をしている。